

『ゴットイーター2・レイジバースト』～神々の二重奏～

平崎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

荒廃した世界に起きた神々の秩序の物語

前置きはこのぐらいに、この物語はオリジナル設定と自分のプレイヤーキャラの容姿を掛け合わせた主人公の物語。ストーリーは基本的な形は原作ですがそこに至るためのストーリーはオリジナルです。過去の物語は無印、バーストではなくリザレクションを元にあります。

又、原作死亡キャラが生きていたりもするかも知れませんが、ご注意ください。

主人公容姿

髪型：スタイル4

フェイス：9番

アイカラー：ウルトラマリン（タイプは1番）

スキンカラー：色味―94 明るさ98

ヘアカラー：白

アクセサリ：バレッタ（クロス）青

共通アクセサリ：バンソーコー（右頬）

ボイス：9番

戦闘服：B特装白上衣・長刀：カサヴェテス学院女下

目次

第1話	ブラッド入隊	1
第2話	実地訓練―序	6
第3話	実地訓練―破	11
第4話	実地訓練―急	19
閑話	予知	24
第5話	極東支部の騎士	28
第6話	獄炎の白狼	35
第7話	ブラッドのお茶会、エミールを添えて	42

第1話 ブラッド入隊

2071年 極東支部 北の居住区

極東支部がハンニバル襲撃を受けていた裏で、北の居住区の更に端の方で少数の大型アラガミに襲撃された事件が起きていた。その日は強い雨の日だった……………。

神機使いの到着は遅れ、既に居住区は壊滅状態であったが奇跡的に死傷者はなかった。

「はあ、はあ——っ!!」

大型のアラガミ『ヴァジュラ』から逃げていた少女は小石に躓き、転がりながら仰向けて倒れる。そこに『ヴァジュラ』が追い付き、捕食の合図の様に咆哮を上げる。

逃げようとする少女は立ち上がろうとするが、恐怖が身体を支配して地面に座り込む。

「いや……………いやあ……………」

人の言葉を理解しようとしないうアラガミに對して、少女の命乞いは無意味であつた。ゆつたりと捕食をする為、ヴァジュラは口から涎を垂らし少女に近づく。

少女が絶望を抱いて死を覚悟した刹那、少女の身体に大量の『ヴァジュラ』の血が飛び散る。

驚き上を向く少女の目に、若干十三歳程の姿の少女がヴァジュラの首に二本の剣を突き刺していた。現れたもう一人の少女の眼光は鬼の目の様に赤く、空中に残像が残る程にギラついていた。

赤目の少女はヴァジュラの首を切り裂き、右の刀剣——俗言う日本刀——を下から振り上げた際の剣風で虫の息のヴァジュラに止めをさす。

「あの、あのー！」

「もう大丈夫、あれが最後だから」

ヴァジュラを倒した少女は地面に座る少女を抱き上げ、極東支部の緊急避難所に歩き出す。

その日は強い雨だったがその後、青々とした晴れだった。ヴァジュラを倒した少女の今の瞳の様に。

2074年 極致化技術開発局 検査室

その事件から三年、極東支部以外の誰の目にも止まることのなかった。

だが『神機無しでアラガミを討伐した子を預かりたい』とラケル・クラウディウスと名乗る少女に極東支部から連れて行かれてから二年、そして今日この日は少女にブラッド因子の投与する日。

「変化がない、失敗か？」

「いいえ、成功よ。良く見て」

失敗かと疑う金髪の青年をほだす様に黒いベールで顔を隠す『ラケル・クラウディウス』。

モニター室のカメラに映る検査室の様子、それはかつて『ヴァジュラを倒した少女』が黒い腕輪を右手に付けた姿であった。

「適合おめでとう。ようこそ、ブラッドに」

極致化技術開発局 庭園

「受付のオペレーターに休憩を取ってくださいって言われたけど——」

「適合検査お疲れ様」

適合検査を終えた少女はフライア——極致化技術開発局の略——の庭園に足を運んでいた。そこで木の木陰にいた金髪の青年に話かけられていた。

「あ……?」

「ああ、悪い。俺はブラッド隊長『ジュリウス・ヴィスコンティ』だ」

「あー！ ごめんなさい!! 私は本日所属となる『時雨雪奈』です!!」

ジュリウスと名乗る青年に急いで頭を下げる雪奈、そんな姿を見たジュリウスは不思議そうに眺める。

「まあ座れ、少し話そう」

「はい」

ブラッド隊長『ジュリウス』と他愛ない会話をすることになった。

「では、君は極東出身なのか」

「そうです。ラケルさんに引き取られる前は極東支部でお世話になっていました」

軽く雪奈は自己紹介やここに来た経緯を話終えた頃、丁度アナウンスが入る。

『新人ブラッド隊員の方は訓練場に向かってください』

「だ、そうだが行かなくいいのか？」

「私は免除だそうです」

「そうか、じゃあ先に伝えておこう。もう一人の新人の訓練が終わり次第、実地訓練を行う」

「わかりました。それでは私は神機の調整に向かいますね」

ジュリウスの横を立ち上り、雪奈はエレベーターの方に走る。そこで思い出したかのように振り向き、ジュリウスに尋ねる。

「ジュリウス隊長はどうしてここに来ようと思ったのですか？ 後で聞かせて下さい」

雪奈は手を振り、エレベーターに乗り込んでいった。一人残ったジュリウスは雪奈の言葉の意味をしばらくの合間考えていたが、自分の準備もあるため神機保管庫に向かった。

第2話 実地訓練―序―

新人ブラッド隊員の研修が終わる頃、雪奈の神機の調整を仕上がっていた。

ブラッドが支給される一般的なクロガネ装備、その長刀とアサルト、シールドとこれまた一般的な組み合わせの神機。だが身に着けている衣類は特注品である。本来ブラッドの制服や戦闘服は黒であるが雪奈は白い長刀用戦闘服を用意して貰い、下は雪奈の通っていた学校のスカート着ていた。その組み合わせの方が可愛くて機能的という理由だ。

「あの一、雪奈ちゃんですかー?」

そこに束ねた髪が猫耳見えるのが特徴的な上下ラフなピンク色の服を着た少女が保管庫の扉から覗き込んでいた。

「うん、そうだよ。もしかしてもう一人の新人?」

「あー、良かったー。隊長さんにいきなり言われてビックリしていたんだよ。私、香月ナナ、よろしくねー、お近づきのしるしにーおでんパン!! どうぞー」

陽気な感じのナナに圧倒され、言葉を返す暇なくおでんパンと言われる串に付いたおでんをパンで挟んだものを手渡された。

「残したら怒るかね、ちゃんと食べてよ」

「ねえ、ジュリウス隊長にも渡したの？」

「え、もちろん渡したよ」

ポカンとする雪奈の目の前で更に驚きの光景が映る。なんとナナは串に付いた状態でガブガブとおでんパンを食べ出したのだ。

雪奈は彼女が神機を調整している合間、チマチマとおでんパンを食べたのであった。

現場に着いた雪奈達は無線で怒られるジュリウスの姿を目撃する。恐らくオペレーターのフランであろう。雪奈はナナからこの実地訓練がオペレーターに話を通したもではなく、ジュリウス独断の行動だと聞かされていた。

「とにかく、次からは一言お願いします!!」

「わかった、新人も来たし一旦切るぞ」

「隊長ー、おでんパン美味しかった？」

「ああ、旨かったぞ」

無線機を切ったジュリウスに直ぐに話かけたのはナナだった。おでんパンの感想をいち早く聞きたかったのであろう。しかしそれ以上に雪奈は涼しい顔で『旨かった』と

言ったジュリウスに驚いていた。雪奈に取っておでんパンの味はなんと言えない味であつた為、ジュリウスの守備範囲の広さにただただ驚くだけだつた。

「よし揃つたな、では実地訓練の前に一つ言いたいことがある」

ジュリウスの話を真面目にナナが聞く中、雪奈は段差したの小中型のアラガミ『オウガテイル』達がこちらを見ていることに気付く。それと同時にオウガテイルが段差を飛び越えてジュリウス達に向かつてきた。

そのことにいち早く気付いた雪奈は神機を片手で構え、ジュリウス達の横を飛び抜けていく。

「どうし——」

「ジュリウス隊長、ナナちゃんをお願いします」

口を大きく開けたオウガテイルに間一髪、刀身を突き刺し撃退する。

そのオウガテイルを皮切りに次々とアラガミが上に上がってくる。

「この段差を飛び越えることなど、大型アラガミ程のものでもない限りはないはずなのに」

「そんなことより、神機を構えて下さい！ ジュリウス隊長！」

雪奈に言われ直ぐ様、神機を構えるジュリウスとナナ。その背後に電気体毛の鬣が特徴的なアラガミ『ヴァジュラ』がいることに雪奈が気付いた時には遅かつた。

ヴァジュラの剛腕の一振りですぐジュリウス達が下に落ちると入れ替り、雪奈の神機がヴァジュラの顔を切りつける。

「隊長！ ナナちゃん！ 今いくから!!」

段差を全力で飛び降り、ジュリウス達の元に駆け寄る。

「すまない、油断した」

「私はぜんぜん平気だよ!」

「良かった、つて安堵している場合じゃない」

顔を切り付けられたヴァジュラが暴れ、周りのオウガテイル達は全滅したが、下に降りたことで反応したザイゴートとコクーンメイデンが現れ、ヴァジュラも落ち着きこちらを睨み付ける。

完全に劣勢であった。

「雪奈、俺とお前でアラガミ達に対処する。その合間にナナ、ここからお前だけでも逃げるんだ!!」

ジュリウスの言葉に従い、神機を構える雪奈はナナの様子が変なことに気付く。

「ア……アア……お母さん……」

突如としてうずくまるナナは頭を抱え、虚ろに『お母さん』と言葉を繰り返す。すると同時に彼女の身体から特殊な波動が発せられた。

「まさか、偏食場パルス!!」

ジュリウスがナナから出る波動の正体を言い当てるより先にアラガミが一斉にナナを狙い飛び込んでくる。

「ジュリウス隊長! ナナちゃんを抱えて走つて!! この場から撤退するよ、道は私が作るから!!」

「ああ! ほらナナ、捕まるだ」

ジュリウスがナナを抱き上げ、雪奈は襲ってくるアラガミを撃破していった。

フライア オペレーター受付

「ジュリウス隊長! ジュリウス隊長!」

オペレーターの少し褐色肌のフランは反応のないブラッドに何度も声をかけていた。

「どうしたのフランさん?」

「ロミオさん……実はジュリウス隊長と新人二名と連絡が取れないんです」

「それ本当!? 俺が様子見てくるよ」

「お願いします」

そこにいた黄色いポップな服を着た青年は急いで神機を取りに走っていった。

第3話 実地訓練—破—

黎明の亡都 図書館裏

「ナナの様子はどうか？」

外の安全を確認してきたジュリウスはナナの看病する雪奈に尋ねる。

「今は落ち着いているみたい。ぐっすり眠っている」

「そうか……」

ジュリウスはそう返し、近くの崩れたベンチに座る。声に元氣のないジュリウスを氣遣い、隣に雪奈が座り話かける。

「ジュリウス隊長、元氣ありません」

「まあ、そうだろう。隊長でありながら、このざまだ。俺は何も出来なかった、雪奈がいなければ今頃どうなっていたか……」

ジュリウスも人間だ。彼は良く効率的な冷酷人間と言われるが、実際は仲間思いの心優しい人間。それが自分の不注意で仲間達を危険な目にあわせてしまったのだ、落ち込みもする。

「ええつと隊長、私は話すのは余り得意じゃないし、敬語も苦手です。だからタメ口になるけど良い?」

「もう既にタメ口になっているぞ」

困り顔をでジュリウスに笑われ、雪奈は少し困惑する。

「それじゃあ言うよ? 良い?」

大きく息を吸い込みジュリウスの耳元に顔を近付け大声で叫ぶ出す。

「バカアア!!」

「……………」

「はあ……………はあ……………ジュリウスさん、私達は神機使い。常に何が起こるかわからない戦場にいる。だから後悔ばかりしてないで、上を向いて自分の仕事をちゃんこなしてよ、隊長」

ジュリウスに取って初めてのことだった。幼少期を養護施設で過ごした彼はその中で上のクラスにいた。だからこそ、年下の少女に怒鳴られること自体が初めての経験だったのだ。

それが可笑しかったのか、ジュリウスは吹き出して大笑いをしだす。

「はは、全くその通りだな。俺も初めてのこと弱気になっていた、ありがとう雪奈」

そつと、手を差し出すジュリウス。雪奈がそれに答える様にジュリウスの手を握ると

その上に、おでんパンが二つ差し出される。

「悲しいときもおでんパン、食べると良いよ」

「ナナ！ 起きたのか。傷むところはないか？」

「ジュリウスさん、人の事言えないけど、病み上りの人に大声出さない」

おでんパンを受け取りナナの手を握るジュリウスに対し、非常識だと注意する雪奈。

ナナはおでんパンを持つ左手と逆の右手で胸を押さえる。

「痛いよ、胸の奥が」

「ナナちゃん、辛いかもしないけど話して、少しは楽になれる」

「うん……」

戦闘中にナナが混乱し、偏食場パルスを発生させた原因はジュリウスの直前の言葉によるものだった。『ナナ、お前だけでも逃げるんだ』それは、かつてゴツトイーターだったナナの母親が最後に残した言葉と酷似していたと本人から伝えられた。

「すまない、俺がナナのトラウマを刺激してしまったのか」

「違うよ隊長、最近調子が悪かったのに言い付けを聞かなかった私が悪いんだよ」

「言い付け？ 誰の」

「ラケル先生の言い付けだよ？」

雪奈の問い掛けにナナはそう返した。そこに疑問が出来、雪奈は続けてナナに尋ねる。

「ナナは今までマグノリア・コンパスにいたの？」

「お母さんがいなくなっただけからは、ラケル先生のマグノリア・コンパスにお世話になっていたよ」

「そう言えば昔、ゴットイーターチルドレンの子を引き取ったと聞いたことがある。君だったんだな、ナナ」

話の流れは自然と自身とラケル先生の繋りの話になっていった。

「雪奈ちゃんはラケル先生とどんな関係なの？」

「そうだな気になるな、折角の機会だ。教えてくれ、これも隊長の仕事の内だからな。自分の仕事はちゃんこなさないと行けないのだから？」

「うっ……」

先ほどの言葉を使われ、逃げ場を失った雪奈は観念した様に話を始めた。

2072年の極東支部、当時十四歳程の姿だった雪奈は現在の極東支部長に呼ばれて、支部長室に来ていた。支部長からフェンリル本部を介しての極致化技術開発局への転属願いが出ていることを伝えられ、雪奈はそれを一つ返事で承諾して待ち合わせの場所に向かつていった。そこでラケル博士と落ち合い、フライアに来たのであった。

「じゃあ雪奈ちゃんは極東支部の所属だったの？」

「少し違うかな、正確には身分証明の為に極東支部にいただけだから」

「しかしそれだけでは、君の高い身体能力の説明がつかない」

「その内にわかるよ………今は『あれ』を倒してからにしよう」

そう言う雪奈は神機を手に取り、図書館の表の方を眺める。

「ジュリウスさん、ナナをお願い」

彼女が言葉を終えるより先に飛び出すのと図書館の本棚を突き破り、ヴァジュラが現れるのは同時だった。

「何故だ!! さっき確認したときはいなかったはず!」

「アラガミだって動物だよ。人より優れた能力を沢山持っているよ」

慌てて神機を握るジュリウスはまだ動けないナナを守る様に構える。

ヴァジュラの出現は雪奈には予測出来ていた。微かだがナナから偏食場パルスが発

現していたことに気付いていたが、ナナを傷付けまいと雪奈は黙っていたのだ。

結果的に危険な目に合わせることになるが、雪奈はここから生き延びことが出来る確信があった。

蠶を帯電させ周囲円状に強力な放電攻撃を仕掛けようとするヴァジュラを止める為、雪奈は踏み込んで神機を水平に切り込む。

それが前に傷付けた垂直の傷と重なり、ヴァジュラは大きく怯み後退する。

続けざまにスタングレネードをヴァジュラの顔に直接ぶつける。爆破し煙幕が上がる中、ジュリウスはナナを連れ、広場の方に出る。

「ジュリウス!? 探したんだぞー!」

「ロミオ、どうしてお前が……………」

ジュリウス達を探索していたロミオと合流したのも束の間、煙幕からヴァジュラが強烈な突進を仕掛けてきた。ロミオにナナを強引に預け、ジュリウスは神機のシールドを展開するが姿勢が悪かったのか、ジュリウスの手から神機がヴァジュラの後ろの方に吹き飛ぶ。

ヴァジュラが再び蠶を帯電させ、強力な放電攻撃を開始しようとする。

「貴方の相手は……………私だあ!!」

ヴァジュラの背後からアラガミにも負けない叫び声を上げ、雪奈はジュリウスの神機

を左手に握り『ゼロスタンス』の構えで空中を滑空していた。

「ハアアー!!」

ヴァジュラを左右の神機でバツの字に切り付け、ジュリウス達の前に雪奈は降り立った。

「終わりだよ」

ヴァジュラのいる空間にのみ無数の斬撃が起こり、ヴァジュラは断末魔を上げて倒れた。彼女は神速の一撃とも言える剣撃を一瞬で、ヴァジュラの身体に何度も叩き付けたのだ。

「ロミオさん、合流出来ましたか?」

「……あ、うん、合流出来たけど」

ナナを抱えるロミオは目の前で起きたことに処理が追いついていなかった。一人の新人神機使いが適合していない神機を使い、大型アラガミを瞬殺する光景を見せられたのだから、例え熟練の神機使いでも驚く。

「ジュリウスさん、大丈夫?」

「ああ、君のおかげで五体満足に生きています」

雪奈はジュリウスの神機と自分の神機を地面に突き刺し、今まで何もなかった様に落ち着いていた。

「えっと、ナナちゃんは何処に？」

「ロミオに預けた」

ジュリウスはニット帽をかぶっている黄色いポップな服の青年の方を指差す。

「ロミオさんだね、ナナちゃんのことありがとう」

「お、おう、先輩だしな」

その後、フランに帰投を指示され、ブラッド各員はフライアに帰還したのであった。

第4話 実地訓練—急—

極致化技術開発局 局長室

「貴様ら!! 無断出撃とはどういうことだ!!」

極致化技術開発局局长『グレム』に無断出撃したブラッド隊は呼び出され、お叱りを受けていた。

「大体、ジュリウス貴様が無断出撃したのが悪いだろう!!」

「すみません」

頭を下げるジュリウスの後ろいるナナは小声で「グレム局長って怖い人だね、おでんパン渡したら機嫌治してくれるかな?」とロミオに尋ねるが「バツカ、もつと怒られるだろ」と返した。

「お前から聞こえているぞ!」

「すみません」

「全くもう一人の新人はいないし、まあいい今日はもう下がれ」

極致化技術開発局 廊下

「疲れたー」

「お腹すいたー」

局長の長い話が終わり、ナナとロミオは緊張が溶け、崩れる様に声を出した。

「すまない皆、庭園で昼食を取ろう、俺の奢りだ」

「うお、ジュリウス太っ腹!」

「流石が隊長さんだねー」

極致化技術開発局 庭園

「俺が奢ろうと思っていたが、まさか先に昼食を作って待っていたとは」

ジュリウス達が先に昼食を買う前に庭園に行くと、そこに学生服姿の雪奈とラケル博士、ラケル博士の姉の『レア博士』がランチマットを引いて待っていたのであった。

「子供達が無事に帰還したのですから祝杯を上げよう。提案したのは雪奈さんです」

「うん、皆頑張ったから」

そこにオペレーターターのフランも加わり、ささやかな昼食会が開かれた。

「貴方、まだ自分のことちゃん説明してないのお」

「ちよ、レアさんが酔って絡んでくる」

昼食会はそのまま二次会になり、誰かが持ってきたワインを成人組は飲んでいた。

赤く長い髪のレア博士は雪奈の肩に持たれ掛かり、ダル絡みを始めたのだ。

「それじゃあ私が皆にバラそうかしらー。実はねえ——」

「雪奈さんは今年二十六の大ベテランなんですう!!」

レアより酷く酔いが回っているラケルが突然大声を上げる。

「俺より年上なのか、だが容姿が若すぎる」

ジュリウスが問い、それにレアが答える。そんな感じで、二次会はクラウディウス姉妹の雪奈の秘密暴露会で終わりを告げたのであった。

「フランさん、ジュリウス達のことお願いします」

「はい、任せてください。不老超人さん」

「もう、フランさんも」

フランはお茶目な冗談を言い、ナナを肩に背負い上げる。ほろ酔いのジュリウスは眠るロミオを抱え、フランに言われるがままに自室に向かっていく。

「あれ? 皆帰ったのおー」

「レアさんは自分で帰れますよね」

「ええー、送って頂戴よお」

と言いつつもレアは自分の足で立ち、庭園をあとにしていた。

「ラケルさん、帰るよ」

「もう少し、こうしたいのです。私の中の私も落ち着きますし」

ラケルは雪奈の膝を枕にして酔いを冷ましていた。ラケルと雪奈の関係はジュリウス達に話したことだけの関係ではない。

「ねえ雪奈さん、私が私じゃなくなったときは……」

「任せて、そのためにここに来たんだから」

不安そうな表情を浮かべるラケルに雪奈は優しく微笑んだ。

極致化技術開発局 ラケル博士の部屋

「本日よりブラッド入隊となります、シエル・アランソンです」

「グラスゴー支部より転属のギルバートだ、よろしく」

白いツインテールの少女と紫色の帽子をかぶる青年。この二人が揃ったことでブラッドは完全稼働となる。

「本来より早いがこれでブラッドが揃った。皆、これからも頼み、特に副隊長」
「うん、任せて」

あの日から数日間に雪奈は副隊長となっていた。

「では、これよりブラッドの任務は極東支部との協同戦線となります。皆、極東支部の先輩達にご無礼のない様にね。雪奈さんは久しぶりの極東支部、楽しんで来てね」

閑話 予知

クレイドル ベースキャンプ地

ここは支部が存在しない地域。この地域の人々は独自の方法でアラガミに対処し、今まで過ごしていたが最近発見された新種のアラガミに脅かされていた。そこで地域の長が極東支部に要請して来たのが、独立支援部隊『クレイドル』であった。

「えつと、こんなに貰っていいんですか？」

「良いのよ、貴方達が来てくれたおかげで、私達は安心して暮らせるのよ」

クレイドル所属のロシア人『アリサ』は地域の日本人のお婆ちゃんに沢山の果物を渡されていた。

「アリサ、受け取ってやれ。お婆ちゃんも毎日来なくいいのに」

「貴方は時雨一族の子、私達の孫も同然なのよ」

アリサの後ろから来た青年はお婆ちゃんを入口先まで見送り、ベースキャンプの椅子に座る。

「本当に良い人達ですね、この地域の人達」

「そうか？ 割りと普通だと思うが」

アリサは果物の入ったカゴを簡易テーブルに置き、中から林檎を取り出す。

「それでお婆ちゃんと何の話をしていたの？」

「ああ、今度は雪奈も連れて来いと」

「雪奈ちゃんもこの地域出身でしたね」

「え、いや、俺達兄弟だぞ」

林檎の皮を果物包丁で剥くアリサはポツカンとする。

「え、『義理』のですよ？」

「確かに義理だが、俺達は腹違いの兄弟だ。サテライトにだって二人で来たんだよ」

「ええー!!」

驚いたアリサは林檎の実を深く抉る。

この前髪が黒色で騒がしくて、目が赤くて、何処にでもいるような顔の男。

今や極東支部にこの人ありと呼ばれる青年は、極致化技術開発局ブラッド所属の時雨雪奈の腹違いの兄であった。

「お父さん酷い人ですね」

「違うわ、俺の母さんの予知能力でこうした方がいいって言ったそうさ。雪奈の母親も公認だそうだし、現にそのおかげで今がある」

アリサは林檎を剥き終え、テーブルに置いてある皿の上に小切りしたものを並べる。中にウサギの形をしたものもあつた。

「そうですね、雪奈ちゃんがいなかったら今頃は……」

「ま、兎も角は——」

小切りの林檎を一つ口に入れ、青年は何処か遠くを見る目で言う。

「今は俺達が出来ることをする、それだけだ」

極東支部で多くの激戦を潜り抜けた青年だからこそ、強みのある言葉だった。

「あ、それよりアリサ、近い内に極東支部に帰ることあるか？」

「はい、ソーマと一緒に榊博士に報告とサテライトの発展計画を詰めに戻ります」

青年はもう一つ林檎を口に入れ、ポケットから小さい紙切れをアリサに手渡す。

「そう遠くない未来、極東支部で大きな悲劇が起こる。そのことをメモ書きしたものだ、雪奈に渡しておいてほしい」

「メモの内容もですが、雪奈ちゃんは今極東にはいないはずでは」

「丁度帰って来てる頃だろう、極致化技術開発局のブラッド隊として」

「ふーん、わかりました。渡しておきます」

この会話の最中、アリサもちよくちよく林檎食べていた為、林檎が最後の一つになっていた。それに手を伸ばすアリサより先に青年は林檎を取った。

「お前が見てわからんだろうから、見るなよ」

「見ません！」

最後の林檎を取られ怒るアリサに平謝りし、青年は自室に帰っていった。

「もう冬夜はいつも自分勝手なんですから」

そう言ってもアリサはそんな冬夜のことを好きであった。

第5話 極東支部の騎士

極致化技術開発局 ロビー

「最近元気良いよね、雪奈ちゃん」

「そうかな？」

「そうですよ、雪奈さん」

ロビーの一角でいつもの様に集まるブラッドの女性陣達、今日も任務終わりにガールズトークをしていた。

「やっぱり極東支部の皆と会えるから？」

「そうかも知れない」

「私と言う大親友がいるのに、妬いちゃいます」

「シエルちゃんとそこまでの時間一緒にいない様な……」

「時間なんて関係ないです。あの日、赤い雨の中、君は单身助けに来てくれた。それは紛れのない真実!!」

極東支部との協同戦線を決定してから、数日後ぐらいに『神機兵の無人運用実験の護

衛任務』に出ていたブラッド。アルファ部隊とベータ部隊に別れ、それぞれ神機兵の護衛中に『赤い雨』が降り始めた。赤い雨、それは近年発生が確認された赤乱雲から降る雨のことで、これに触れると『黒蛛病』と呼ばれる致死率九十九%の病を発症する危険な雨である。

赤い雨の中、神機兵を護衛していたシエルは一人取り残されて、グレム局長の「いいから、神機兵を守れ」と言う命令を受けて、その場に待機していた。

誰も上官に逆らうことが出来ない状況の中、雪奈は単身でシエルの救助に向かったのであった。その際、赤い雨に触れたはずの雪奈はメデイカルチックを受けた結果、黒蛛病は発症していなかった。

「恋は盲目だよねー」

「同性愛は別にいいと思うけど、私は同性愛者じゃないから」

「愛は常識を越えます!!」

この通りシエルはそれを機に、何かに目覚めたのとブラッド特有の力『血の力』を自力で習得したのであった。

「お楽しみのところ悪いが各員集合だ」

ロビーから受付に繋がる階段の上にいるジュリウスに呼ばれ、ブラッド女性陣は受付の前に集まる。

「極東支部との協同戦線に向け、事前に連携力の向上を上げる為、極東支部より神機使いが来てくれた」

ジュリウスがそう言うのと貴族らしい服装の青年がブラッド各員の前に現れる。

「僕は栄えある極東支部より来たエミール——」

「エミール、元氣だった？」

「ぬお、SAMURAIが何故ここに！」

貴族っぽい青年に慣れた態度で話し掛ける雪奈、貴族っぽい青年は『SAMURAIがいる』と大声を上げる。

「あれ言っただけでなかった？ 今はここで神機使いをやっているんだよ」

「なんと!? ではSAMURAIの剣術を見ることが出来るのか!! うおおお！ 直

ぐにでもミッションに同行したいのだがブラッド隊長!？」

興奮が抑えられないエミールによって急遽、ブラッドはミッションに出るのであった。

黎明の亡都

「エミールさん、凄い!!」

「ハハハ、僕の手には掛かればこの程度、造作もないさ」

ナナは同じブーストハンマー使いであるエミールが猿の様な姿の中型種のコンゴウを華麗に倒す姿を見て、エミールとブーストハンマーについて語り合っていた。

「前より酷くはないね」

「極東支部に転属した直後、雪奈くんの厳しい鍛練を積みめばそうなる……今でもぞつと
する」

極東支部転属直後のことを思い出し、顔を青褪めるエミール。

「鍛練の内容も気になるけど、雪奈はその頃はラケル博士の護衛をしていたじゃないのか?」

「その頃はフライアの運用が本格化することになって、準備に時間が掛かるから休暇を貰っていたんだよ」

ロミオにそう返す雪奈、そこにギルバートが続けて質問をしてくる。

「副隊長は極東支部で教官でもやっていたのか?」

「ううん、ただの非戦闘員」

「ではどうしてエミールさんを鍛えたのですか？」

シエルに言われ、少しだけ考え込む雪奈。

「構わない、僕と盟友、そして盟友の妹の話は誇れるものではないが恥じる様なことでもない」

「わかった、実はね」

エミールが他の支部から極東支部転属になった頃、エリナって言う神機使いも極東支部所属になったの。その娘はエミールの盟友『エリック』の妹で、昔エリナにエミールは『僕のことを兄だと思ってくれ』と言って、エリナが激情するってことがあったんだ。

エリナの兄『エリック』は極東支部で随分前に戦死していたね、エリナはそれ以来塞ぎこんでいたんだ。そこにエミールの無神経な言葉でエリナもキレちゃって、そんな二人が同じ部隊に配属になったって部隊隊長に聞いて、私は様子を見に来ていたんだ。

まあそこで『自分にはエリナを支える力がない！』と嘆いているエミールに出会って、一から戦闘術を教えることになった訳。

「それにね、エリナちゃんは大事な友達だったし、エリックとも仲が良かったんだ。だからね、エミールがエリックの意志を継いでエリナを守るって聞いたとき嬉しかったん

だ」

「改めて聞くと恥ずかしいな、だが！ 騎士としてその意志は今も揺るがないと宣言しよう!!」

「それじゃあ、証明して見せてよ」

雪奈は空から飛来する影に向けて、神機を構える。

「感応種の反応です。皆さん、注意して下さい」

フランのオペレートも入り、ブラッド各員とエミールも神機を構える。

飛来した影は中型種のシユウ神属感応種『イエン・ツー』、ブラッドの主な運用理由の一つである感応種。ブラッドの持つP66偏食因子―通称ブラッド因子―は通常の神機使いより強い感応波を持ち、感応種の感応波の影響を受けづらい。故にブラッドの神機は感応波の影響下でも正常に稼働し、感応種に対する唯一の方法であるのだ。

「ブラッド各員、戦闘準備だ。エミール、少し下がってもらえるか。副隊長も」

ジュリウスはブラッド因子を持たないエミールと、ブラッド因子の効力が薄い雪奈に下がる様に命じたが、二人はイエン・ツーの前に立つ。

「ジュリウスさん、私、ちよつとエミールの全力を見たいから少しだけ時間をもらっていい？」とと言うよりもらうね」

「そう言うことだ、ブラッドの皆こそ下がって欲しい」

イエーン・ツーは戦闘体制を取り、自分であるチョウワンを形成する。が、雪奈とエミーは一目散にイエーン・ツーに向かって、鋭いステップで近付き、神機をイエーン・ツーの足に叩き付ける。

イエーン・ツーは大きくよろめき、もう一つ的能力によって集中攻撃の的となっていたナナから雪奈達にチョウワン達は標的を移した。

「いいい！ 闇の眷属達よ！！ 騎士の名にかけて、貴様らを滅ぼしてくれる！！」

第6話 獄炎の白狼

感応種『イエン・ツー』との戦闘開始から三分。既に虫の息のイエン・ツーは気力のみで立っている状況だった。

「これで決めるぞ、闇の眷属！ チェス……トオオオ!!」

エミールの握る神機『ポラーシユターン』——自ら命名——を背後に回し、ジャンプして上空からイエン・ツーの頭に強力な一撃を入れた。通常の神機使いの攻撃は感応種に対し無意味はずだが、エミールの攻撃一つ一つは唯『単純』に重い一撃であった。一瞬でも傷を付けることが出来るならば、『強引』に肉質を『潰す』ことが可能であろうと、かつて雪奈と一人の神機使いが提案した。それにより極東支部の一部の神機使いはオラクル細胞を素早く、微塵切りの様にすることで感応種に対応していたのであった。

頭から胸元まで無惨な程に潰され、イエン・ツーは倒れた。イエン・ツーの下半身も完全に折れ曲がっており、原型を止めていかなかった。

「エミール、コアまで潰さないでよ」

感応種の貴重なコアも一緒に潰したエミールに悪態を吐く雪奈はじつと目で睨む。

「くっ、僕としたことがやり過ぎた！ 一時期の感情に流された愚かなぼ——ぐはあ!!」
彼の謝罪など聞いてないかの如く、殴り飛ばす雪奈。

「ち、ちがうんだ！ 今回は許してくれと——ゴハア!!」

再度吹き飛ばされたエミールは地面に転がり気絶する。だが雪奈が追撃した訳ではない、白い大型の狼がエミールを背後から殴り飛ばしたのだ。

「ブラッド各員、大型感応種との戦闘だ。気を抜くな」

ジュリウスの号令でブラッド各員は次々と神機を構え、白い狼と間合いを取る。

「あのアラガミは？」

「雪奈ちゃん、隊長の講義聞いてないから知らないだよ。マルドゥーク、ガルム神属の感応種だつて」

「ガルムも知らないよ」

雪奈の発言にロミオは転けそうになる。ナナは呆れ、シエルは「流石副隊長」と言い、ギルはタメ息を吐く。

「仕方ないだろう、雪奈はラケル博士の護衛で忙しいのだから」

「本業疎かにしていいと言う訳じゃないだろ」

マルドゥークと睨み合うジュリウスは背を向けたままギルに言う。

「マルドゥーク、似てるけど違う……」

雪奈は何か言葉を溢し、ジュリウスとマルドゥークの合間に割って入る。ブラッド各員の制止を聞かず、雪奈はマルドゥークに神機を突き付けた。

「でも腕試しには良さそう」

マルドゥークは周りに赤い偏食場パルスが発生し、周囲にアラガミを呼び寄せ、オラクル細胞を活性化させる。

マルドゥークの赤い咆哮により、集まってきたアラガミ達をブラッドが相手している中、雪奈はマルドゥークと交戦中だった。

活性化したマルドゥークは俊敏な動きと白いガントレットから放たれる炎を武器に雪奈を攻め立てる。隙が少なく、雪奈はろくな攻撃を当てることが出来ず、マルドゥークの一撃を避けるのが背一杯であった。

「ちよつとは止まってよー」

神機形態をブレードからアサルトに切り替えつつドロバックスショット、最低限の威力と最高率のオラクル消費率を持つ連射弾をマルドゥークの頭目掛けて射つ。

それでも秒速で打ち続けても怯むことなく前進を続けるマルドゥークは、ドロバックスショットにより後退している雪奈に追い付き、両手のガントレットを発熱させて爆炎

を起こそうとする。

「させるかよー！」

ロミオの声と共にブラストの高威力ブラスト弾がマルドゥークの頭に直撃、雪奈の後方にいたジュリウスが前に駆け出す。

「活路は俺が開く、決めろ副隊長!!」

ジュリウスのブラッドアーツ『神風ノ太刀・鉄』と同時に血の力『統制』により、雪奈は神機解放（バースト）を一段階上げる。

マルドゥークの前足にジュリウスはブラッドアーツを叩き込み、ダウン状態になったマルドゥーク。そこにナナ、シエル、ギルからのリンクバーストにより、更に最大まで神機連結解放状態になり、雪奈は走り込む。

「行くよ！」

雪奈の神機は蒼いオーラを纏い、マルドゥークの左目を切り付ける。

目を深く抉られたマルドゥークは吹き飛び、少し離れたところで立ち上がる。

「まだ、やるの?」

マルドゥークは暫しブラッド各員を眺め、周りのアラガミを引き連れて何処かに撤退していく。

「何とかなつたか。副隊長、良くやった」

「ジュリウスの労いの言葉に続く様に、ブラッドの皆が雪奈を誉める。

「俺達の連携って、最強じゃね」

調子のいいロミオが言うところジュリウスも頷いて、ブラッド各員に言葉を送る。

「ナナ達との実地訓練のこともあり、ブラッド隊長がちゃんと務まるか、不安だったが大丈夫そうだな。これも副隊長のおかげだ、ありがとう」

「皆に迷惑かけてる方だと思うけど。こちらこそ、皆ありがとう」

帰還用のヘリが到着したことがフランから伝えられ、雪奈は気絶しているエミールを背負って、発着場に向かっていった。

極致化技術開発局 ロビー

「皆、怪我もなくて良かったですわ」

帰還後、ロビーで休憩中だったブラッドの前に直ぐに駆け付けたのはラケル博士だった。

「ラケル先生、車椅子をそんなに急いで動かしたら、危ないですよ」
「そんなことより、子供達が優先ですわ」

シエルの心配を他所にラケルは言い放つ。雪奈とギル以外のブラッドはラケルの養護施設で育つた者、シエルもラケル博士のことを親の様に思っているためそれ以上は言い返せなかった。

そこにエミールを病室に連れていった雪奈が帰ってきた。

「ラケルさん、自分でここまで来たの？」

「もちろんそうですわ」

「当たり前みたいな顔しない、転けたらどうするの？」

ブラッド達の前でラケル博士は雪奈に静かに説教され始める。

「心配なのはわかるよ。でも皆も、私だってラケルさんの身に何かあったら心配するん

だから、無茶しないで」

「でも、子供達が——」

「無事に帰ってきたって報告は受けているよね」

「うう……」

押し黙るラケル博士、ブラッドの皆は珍しい光景に目を疑う。

「彼女は昔からこんな感じさ」

頬にガーゼを張ったエミールがブラッド達の前に唐突に現れ、何処か懐かしい顔で言う。

「何、様は超世話好きな家政婦だ。SAMURAIは万能なのだろう」

エミールはそこで大声で笑い出す。

「エミールうるさい、ラケルさんと一緒に廊下でバケツ持って反省して」

「なんと?!」

「私も?! どうやってバケツ持つの?!」

「車椅子に座って、手の平の上にバケツを乗せればいいよ」

「ええ……」

第7話 ブラッドのお茶会、エミールを添えて

極致化技術開発局 ロビー

「なーんか最近退屈だよねー」

「そうですね、退屈ですね」

ナナがぼやきシエルが答える。ここ何日間は同じ様な会話が続けていた。

あのマルドゥークとの一戦からアラガミが大人しく、被害情報も入ってこない。雪奈が言うには『現在のアラガミ達の長であるマルドゥークが何処か消えたから、ここらへんのアラガミも消えた』と言うことらしい。

理由はどうあれ、神機使い達はアラガミがいなければ無職みたいなものであり、ブラッドとエミールはフライアで無駄に時間を潰していた。

「皆、紅茶を入れたのだがどうか？」

「良いですね、ジュリウス達も呼んできます」

「ねえねえ、美味しいお菓子もある？」

「もちろんあるさ」

「やったー」

エミールの誘いに乗ったシエルはジュリウス達を呼びにエレベーターに駆け込んでいった。

シエルに呼ばれ、集まったブラッド男性陣。シエルは一人いないことに気付く。

「雪奈さんがいらっしやらない様ですね」

「ああ、副隊長ならラケル博士の部屋にいる。何でも有人神機兵のパイロット募集方法について相談中らしい」

ジュリウスは『後でこのお菓子を持っていこう』と言い、雪奈抜きでお茶会が始まった。

「しつつかし、あれだよな。いくらラケル博士の護衛として呼ばれたからって、ほとんど一緒にいるよな、雪奈って」

ロミオは不思議そうに言う。それに続く形でブラッド各員も『何でだろう?』と考え出す。

ギルが『何か知っているか?』とエミールに尋ねるが、エミールも『知らない』と答える。

「前にラケル博士に雪奈との関係を聞いたがはぐらかされると言うことがあったな。ラケル博士がそんなことを言ったのが珍しかったから、鮮明に覚えている」

ジュリウスが思い出した様に言い出す。そこにエレベーターが上から降りてき、中からラケル博士の姉『レア博士』がロビーにやってきた。

「皆集まって、難しい顔してどうしたの?」

「レア先生、質問があります。雪奈さんとラケル先生はどんな関係何ですか?」

「流石に四六時中いる様だと貴方達も気になるわよね。ちよつと長い昔話になるけど良し。」

ラケル博士、レア博士が学生だった頃、学校の一般募集で旧日本列島の『独自の方法でアラガミに対処する里』に四泊三日の修学旅行に行く機会があった。当初クラウディウス姉妹は研究者になる為に勉強していた二人は、多くの知識を得るため修学旅行に参加した。

里に着いた途端にラケルは普段と違い、活発に活動する様になり、レアが来て良かったと安心していると彼女が行方不明になっていた。

レアは引率の先生に報告し、一人でラケルを探すことにする。その最中、里の青年に出会い、彼も妹を探していると一緒に行動することになった。

夕方過ぎ、何処を探してもいなかったラケルが青年の妹と一緒にひょっこりと現れ、騒動は終わりを迎えた。

それから青年『時雨冬夜』と妹の『時雨雪奈』の家に下宿することになり、半年間の修学旅行が終わった。

「つまり、昔からの友達と言う感じですか？」

「まあ、半年間もいるともう一つの家族って感じね。もちろん貴方も家族よ」

レア博士の発言を聞いたブラッド一同の反応は様々な表情を浮かべ、一通り彼らをかかった彼女は研究室に戻っていった。

「レア博士、もっと機敏に動いて！」

「ちよ、少し休憩を……!」

「お姉さまに同意です……喉がもう」

「ラケル博士、そこは気合です!」

研究室でなにやら怪しい活動する三人、レア博士は身体の動きをCGにする装置を身に付け、ラケル博士はマイクの前で倒れ込み、雪奈はパソコンの操作をしていた。

そこにお菓子を差し入れに来たジュリウスが研究室に入ってくる。

「……………失礼します」

「待って!」

「ジュリウス、このことは内密にして!」

「はい……わかりました……」

二人の博士に責め立てられたジュリウスはお菓子を置いて、そそくさと研究室を出ていった。

その後しばらく、ジュリウスがよそよそしくなかったのは当然のことだった。